

プレスナーの哲学的人間学における位置性の理論(3)

奥 谷 浩 一

要 旨

これまでの2回にわたる前稿では、プレスナーの哲学的人間学によって立つ哲学的諸前提とその出発点となった哲学的・生物学的論争について考察した。本稿からはいよいよ、その哲学的人間学の中心思想である位置性の理論の核心的な部分を取り上げる。まず本稿では、有機的生命一般の本質的諸性質と、これを踏まえた植物的生命の本質的諸特徴とにかんするプレスナーの理論を解明し、論評する。初めに、生命体とその環境領野である媒体とのあいだに想定される境界、そしてこれにもとづいて生ずる位置性の概念のプレスナー的意味を再確認したうえで、生命体一般がそなえる動態的および静態的性格、そして生きたものの自己調節可能性と調和等能性などにかんするプレスナーの理論を解釈する。そして、開放的な有機組織形式をもつと特徴づけられる植物の位置性が生命循環のなかでどのように機能し、またそれが動物の位置性または位置形式とどのように区別されるのかを解明し、あわせてプレスナーのこうした接近の視点の積極的面と限界とを考察する。

目 次

はじめに

第一章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(1)

- (1) 『有機的なものの諸段階と人間』の構想へといたるいくつかの諸契機
- (2) 生の哲学の問題状況
- (3) プレスナーの哲学的人間学の課題意識
- (4) 哲学的人間学の方法；カントの批判哲学，解釈学，現象学（以上，第66号掲載）

第二章 プレスナーの哲学的人間学の諸前提(2)

- (1) デカルト派の二者択一原理との対決
- (2) ユクスキュルの環境世界説をめぐる
- (3) 二重アスペクト性の提起
- (4) ケーラーとドリーシュの論争；機械論と生氣論との対立を超えて
- (5) 境界の概念
- (6) 有機的な本質諸徴表の理論の提起（以上，第68号掲載）

第三章 生命性の現存在様式と位置性

- (1) 境界と位置性の概念
- (2) 生きたものの動態的および静態的性格
- (3) 生きた個体のシステム性格，自己調節可能性，調和等能性
- (4) 有機的被組織化性と諸器官の意味

第四章 開放的形式をもつ生命としての植物の位置性

- (1) 有機組織と生命圏
- (2) 適応, 生殖, 遺伝, 選択
- (3) 進化論とダーウィニズムの評価をめぐって
- (4) 植物の位置形式

(以上, 本号掲載)

第三章 生命性の現存在様式と位置性

(1) 境界と位置性の概念

プレスナーは、本論においてこれまで展開してきたように、有機的な生命とその境界との関係、有機的生命が境界をつうじて環境領野に対してとる位置性の関係という観点から、有機的なものの諸様態のア・プリオリな理論を導出し、よってもって植物・動物・人間のそれぞれの段階の本質的諸特徴を解明しようとするのであるが、そのさいに彼は、生きた肉体にもとづいてわれわれの直観のなかに与えられるさまざまな事態を分析し、いかなる諸条件のもとでわれわれは生命あるものを生命あるものとして同じように認識するのか、生命あるものがわれわれの直観的事態のうちで生命をもたないものに比べてどのような本質的諸特徴をもつのかを分析することから出発しようとする。生きたものは、生きてはいないものとは異なって、伸張性・弾力性・湾曲性などの可塑性をもつばかりではなく、恒常的な非恒常性・規則的な不規則性などの弁証法的性質をもち、また時間的・季節的なリズムやさまざまな刺激に対する傾向性格をもち、この傾向を充足する生き生きした現出運動をとまなうほか、さらにエクトロピー性 Ektropismus⁽¹⁾と名付けられるような非合理性と自発性をももつであろう。そして、これらの諸性質が多く含まれていればいるほど、対象となっている事物は生き生きとした生命性の外見を示すであろう。プレスナーはこれらの諸特徴を「生命性の指示的な本質諸特徴」と名付けた。しかし彼は、物質代謝、成長、運動、自己増殖、遺伝などの諸概念を列挙することによって生命を定義しようとする普通の試みがそうであったように、これらの「指示的な本質諸特徴」をただ挙示するにとどまっているだけでは生命世界の根本的特徴を把握しえないと考える。「生きた物体は境界を実現する物体である」とプレスナー自身が言うように、プレスナーによれば、これらの「指示的な本質諸特徴」は、有機的なものとその境界、有機的なものと周囲の媒体との間の位置的関係にまで哲学的な考察を深化し、「生命性の構成的な諸特徴」、言い換えれば「有機的なものの諸様態」を把握することによって初めて、その本来の本質的意味を獲得しうるのである。

プレスナーの哲学的人間学体系の出発点は、生命あるものの境界と周囲の媒体にたいして生命あるものがとる位置性という観点からすれば、死せるものと生きたものとを、無機物と有機的生命とを最初に大きく分け隔てるものは、まず前者が生体膜をもたずに直接に外界および他者、または媒体と直接・無媒介に、ストレートに働きかけ合うのに対して、後者が生体膜と呼

ばれるものをもつことによって外界からおのれを遮断し、外界と有機的生命とを区分する境界を有するとともに、この生体膜の微妙な構造をつうじて外界にたいして媒介的・選択的に働きかけると同時に、外界からさまざまな物質をも選択的に取り入れたりもする、という点である。このことはさらに、有機的生命の構造と機能の両面における基本単位である細胞が、こうした重要な働きをする生体膜を有することによって、自らの閉塞点および外界との接触点として境界をもち、境界をもつことによって外界にたいして距離を取り、そうすることによってさらに外界または媒体にたいして位置性をとり、位置的に関係するという、無機物と対比した場合の有機的生命の構成的な特徴へとつながってゆくことになる。

それと同時に、境界を有する生命体は、生命体(肉体)がおのれの内部へと向かう「自らに対向して」 *ihm entgegen* という関係とおのれの外部へと向かう「自らを超え出て」 *über ihm Hinaus* という関係との弁証法的な統一でもあって、プレスナーはこれを生命あるものの二重アスペクト性と名付けた。この二重アスペクト性は、言い換えれば、事物が実体的な核心 *Kern* と諸性質を担う諸側面との二重のアスペクトとしても存在する。生物はおのれを取り巻く周囲と媒体とのうちで生命活動を営まざるをえないから、有機的生命は同時に周辺領野 *Umfeld* のうちにあり、他の諸生命をふくむ生命全体の循環の圏域のうちにあり、したがってまた周辺領野に対して何らかの位置関係をとらざるをえない。この意味では、有機的生命は周辺領野に対しては措定された存在であり、周辺領野または外部環境全体を先行所与としてもたざるをえない、とプレスナーは言う。こうした位置関係のなかで生命体と外界との内的で複雑な弁証法的関係が作用しているという認識と、こうした関係のうちに植物、動物、人間を区分し特徴づけうるという着眼点こそは、難解なア・プリオリ主義にまわりつかれているとはいえず、生物学者として出発したプレスナーの哲学的人間学の独自の点であり、こうした有機的生命の構成的特徴から、植物、動物、さらに人間の区別と特徴づけに向かって、諸カテゴリーと諸規定が一貫して演繹的に展開されて行くことになる。そしてここに、後に展開するように、ヤーコプ・フォン・ユクスキュルの生物の環境世界説から大きな影響を受けて展開されるプレスナーの人間学思想の制約と限界もまた、同時に含まれていると言わなければならない。

プレスナーの哲学的人間学の諸カテゴリーのうちで最重要概念であるこの位置性概念について、もう少し詳しく検討しよう。彼はこう述べている。「それゆえに有機的な物体 [肉体] は、その生命性という点で、その位置的性格によって、いかえればその位置性 *Positionalität* によって、無機的な物体からは区別される。位置性という概念で理解してほしいのは、有機的な物体の本質がもっている、ひとつの物体をその存在において措定された物体にするという根本特徴である。すでに述べたように、『自らを超え出て』の契機と『自らに對向して、自らのうちへ入り込んで』という契機とは、生命ある物体がそなえている特種な存在、つまり、境界を通り抜けながら開始され、そうすることによって措定されうるようになる特種な存在を規定する。物体は、『自らを超え出て』および『自らに對向して』という特種な諸様式で、自分

から際立たせられ、自らに対して関係づけられる。もっと厳密に言えば、物体は自らの外部と内部とにある。生命をもたない物体はこの錯綜を免除されている。」⁽²⁾ プレスナーはそのほかの箇所でも、境界と位置性との関係についてさらにこう述べている。「存在する境界は生成である。生成とは、方向が対立するという規定によって必然的に二重に方向づけられた生成であり、物体〔以下、肉体と同義である一筆者〕を超え出た、そして物体のなかへと入り込む生成である。物体は、自分自身からこうして際立つということにもとづいて、自らの境界づけにおいては、自らのなかへと入り込んで、そして自らの外へと出て措定された物体であり、この物体は自らの外部へ立っていると同時に自らの内部に立っている。物体はそのような規定性をもつ物体として、位置的な性格をそなえており、過程のなかに関与された物体として、自己を展開する物体として、位置性のこうした性格を自らの死にいたるまで維持しつづける。」⁽³⁾

有機的生命がもつこうした境界と位置性との関係から、さらに多くの副次的諸規定が導出されることになる。先の引用にすでに含まれていることだが、そのひとつは、「生物はその周囲に対向した状態に置かれて現れる。生物は領野のなかにいるのだが、この領野にたいする関連は生物から出て、そしてこの関連は逆方向で生物へと還帰する。…もっと厳密に言えば、事物は自らを出て、ひとつの場所、つまり自らの『自然的な場所』を主張する。」⁽⁴⁾ というプレスナーの叙述でも明らかのように、ひとつは有機的生命がおのれの境界をつうじて外部環境世界と交渉するという関係のうちに含まれる必然的な二重アスペクト性、または二重方向性 *doppelsinnigkeit* である。

ここには確かに、有機的生命とそれを取り巻く環境としての周辺領野とのあいだの相互作用がなければならない。この相互作用は、一方ではこの有機的生命が自らの境界を超えて外部世界と関係せざるをえないが、これが「自らを超えて」 *von sich aus* という方向性である。他方では、有機的生命には境界を通過して何らかのかたちで外部世界からの影響が入り込まざるをえないが、これが「自らに対向して」 *gegen sich* という方向性である。このふたつの方向性は「逆向き」 *gegensinnig* の方向性であって、プレスナーが有機的生命に対する同一方向（意味）性と反対方向（意味）性と名付けた関係であり、有機的生命は運動・移行・生成・成長・生命過程・老化・死などの生物特有の行動形態と現象とをとるが、これらの営みを可能にする条件として、境界と位置性、そしてこれにもとづく二重方向性の関係がある。もちろん、この二重方向性は、有機的生命が境界を通じて外部に対して自らを開放するとともに閉鎖するという関係、すなわち閉鎖性 *Abgeschlossenheit* と開放性 *Aufgeschlossenheit* とが前提としてあって初めて可能である。プレスナーによれば、「位置性という、生きた物体と生命をもたない物体とを区別する標識は、両方ともおたがいに逆方向で相対している有機体と周辺領野とが関係しあっているということにある。」⁽⁵⁾ プレスナーが生命の構成的な本質諸徴表と名付けたものは、こうした生命の根本的性格にもとづいており、これにはやはり一定の科学的根拠があるといえよう。

次に、以上に総括したことと密接に関連して、生物体が境界をもつことによって生ずるのは、おのれと外部世界とのあいだの「距離」 Distanz である。プレスナーはこれをフィヒテの用語を用いて「空隙」とも言い換えており、他の箇所では生命一般がもつ「空隙法則性」に言及している⁽⁶⁾。プレスナー自身の言葉で言えば、「境界を含意する物体は自らを超えていて、そして自らのうちへ入り込んでいる。そのような要求を満たすためには、事物は自ら自分との距離を保つことができなければならない⁽⁷⁾」のである。無機物とは異なって、有機的生命は外部世界からおのれを退けたり、あるいは一定の条件をそなえた外部世界に対して向かって行くという仕方をとることができるが、それも有機的生命とが外部環境とのあいだに距離が存在するためである。生物が外部世界に対してとる距離と空隙とは、プレスナーの哲学的人間学の体系的叙述がやがて植物・動物、さらに人間の各段階へと進んでゆくにつれて、やがて生物と外部世界との裂け目または断絶、そして対立という実存的状況にまで進んでゆくことになる。

第三に、生命と外部世界とのあいだの距離または空隙は、生命体に「先取り」 vorwegnehmen と周囲から「際立つ」 sich abheben, または「際立たせられる」 abgehoben という特徴を与えることになる。プレスナーが言うように、「境界は肉体（事例によれば）の一部をなすから、いわゆる『境界付けの鮮明さ』は肉体にあてはまるのであって、この鮮明さによって肉体はそれの周囲から際立たせられ、周囲に対向して自立的となる。」⁽⁸⁾

プレスナーは、こうした境界によって閉ざされた有機的生命の内部には、外部存在に対して二重の関係をとることによって、例えば細胞内諸器官を統合する何らかの機能が働いているとし、その働きの中心点または主体を「自己内存在」として規定する。こうして第四に、有機的生命自らのなかにある中心点としての「自己内存在」が問題となる。プレスナーによれば、「境界にとっては、閉鎖する働きと開放する働きとの統一は、境界の背後に位置する視点から見れば、依然として本質的である。」⁽⁹⁾ この「背後に位置する視点」とは、境界に対して自らの肉体を閉鎖するかまたは開放する働きをもつものであり、肉体のうちにありながら、物体としての肉体それ自体とは区別された、境界とこれを実現する肉体の背後にある点であり、「自らのなかに潜んでいる存在」または「自らのなかで措定された存在」⁽¹⁰⁾であり、いっそう具体的に言えば、肉体の諸部分を統一し、結合の中心点へともたらすものことである。プレスナーは、この段階ではまだ意識または自我とはどういえないこうした「自己内存在」について、こう述べている。「物体 [肉体] にそなわっているこの『自己内存在』を明らかにする可能性はひとつしかない。物体は自らのなかにある中心点に関係する。この中心点は、空間的な場所をもたないが、しかし、周囲に境界を設定された物体領分の中心として機能し、そうすることによって物体領分をひとつのシステムにする、という可能性である。この関係は、物体を構成するすべての諸要素（諸部分）へと広がっていき、そして全体としての物体へと広がっていく。物体がみずからのうちに措定されてあるかぎり、物体のなかにあるこうした中心関係は、同時に特殊な性格を受け取る。物体に対してはあるひとつの点が対抗するのだが、それは、物

体によって占拠されているにもかかわらず、非空間的な性質をもった領分のなかでそうするのである⁽¹¹⁾、と。こうした「自己」または「自己内存在」はおのれの空間と時間とを主張する。すなわち、それはおのれのうちに空間と内的時間とをもち、空間具有的であるとともに時間具有的である。

ところでプレスナーは、植物であれ動物であれ、また下等であれ高等であれ、すべての生命を貫通している構成的な本質諸徴表のひとつとして「自己内存在」または「自己」にかんする議論を展開しているのであるが、具体的・経験的にはいったい何を意味し、また現代生物学の水準に照らして見ればいったいどのように評価されるであろうか。近年大きな飛躍をとげた現代の免疫学によれば、身体的に自己を自己として規定するものが生物の免疫系にあることがさまざまなかたちで知られるようになった。原初生命さえも、また生物体内の免疫機能に関する体内細胞ですらも、自己を非自己と識別して、自己から非自己を排除する機能を有しているという。個々の有機的生命はそれぞれの自己をもち、この自己を非自己と区別して行動することができなければならない。例えば、胸線の存在は古くから知られていたが、この胸線から供給されるリンパ球はそのギリシャ語名称である *τύμος* の頭文字をとって T 細胞と名付けられている。この T 細胞は、いくつかの役割分担があって、「自己」と「非自己」を見分ける分子である T 細胞抗原レセプターを自分の細胞壁に張りめぐらしており、そうすることで生物体内に侵入した異物を非自己として自己から区別し、非自己を徹底的に排除しようとする。また、例えば生物体内にはマクロファージという捕食運動を行う白血球系の細胞があり、ヒトのマクロファージの表面には HLA 抗原が一揃いそなわっていて、この抗原こそがそれぞれのヒトの個体的特徴を形成し、自己の標識を構成するとともに、これと異なった分子構造をもつものを非自己として拒絶反応を起こす⁽¹²⁾、といわれている。つまり、高等な動物の意識または精神というレベルにおいてではなくて、すでに細胞レベルまたは分子レベルにおいてすらも、自己を非自己と区別できるシステムが生物には大なり小なりの程度にそなわっていて、それだからこそきわめて下等な動物ですらもおのれとおのれの仲間とを区別し、おのれの異性を区別し、またおのれにとっての異種・異生物を区別しうるのである。例えば、生命世界を構成する心的諸能力の外部に精神の原理を置いたマックス・シェーラーや、自己と意識を人間にのみ帰属すると見なしているかに見えるアルノルト・ゲーレンとは異なって、プレスナーのこうした自己論がいかに現代でも十分に通用する生物学的・哲学的射程をもつものであるかは明らかであろう。

(2) 生きたものの動態的および静態的な性格

「自らを超え出て」と「自らに対向して、自らのうちへと入り込んで」という二重の契機をおのれのうちに統合している生きたものは、たえず生成し持続する存在であり、もっぱら過程においてのみ存在するという様式だけを取り、またおのれの境界づけに支配されながらもこれ

からたえず離脱する存在，すなわち移行する存在でもある。「自らを超え出て」という生命性の契機は生きたものの動態的な性格を構成する。プレスナーによれば、「生きた物は、生成と持続がもつ境界制約的な諸側面を過程へと統合することができる。」⁽¹³⁾ また、生きたものは、自らを輪郭づけながらすべての変化を通じて同一的な有機的形式を保持するが、この形式が「ゲシュタルト理念」であり、この「ゲシュタルト理念」はまた特定の類型でもあって、個々の物はこうした類的形式法則を結合しながらこの類型のひとつの事例として現象する。こうして個性性がさまざまな類型とのかかわりで位置づけられる。われわれがここで注意しなければならないのは、プレスナーが生きたものの生成、過程、移行などの動態的本質諸特徴から、ゲシュタルト的な形式理念、個性性などにいたるまでの諸カテゴリーを、境界の存在、境界制約性、境界離脱性などというように、そのすべてを境界へと結びつけていることである。プレスナーは、こうした理論的諸前提から「有機的世界の類型性と段階付けとは本質必然的な様相であって、これにしたがって生命は物理的な実在性を得る」⁽¹⁴⁾と述べているのであり、ここに植物・動物・人間のそれぞれの類型化と段階づけという彼の哲学的人間学の体系的展開へと進んでゆく理論的根拠がある。

プレスナーによれば、生きたものは何よりも過程のうちにあるが、この生命の過程こそは、おのれの現在に対向しつつ、またおのれを先行的に先取りしつつ、おのれを超出しながら、他方では過ぎ去った過去をおのれのうちに保持するという発展的性格と構造とをもつ。これは生きたものがおのれの境界を実現するということでもある。過程とは、「まだない」と「もはやない」とのダイナミックな統一であり、生成と持続、移行と静止の矛盾に満ちた弁証法的統一でもある。プレスナーはこう述べている。「過程から理解されるのは次のことである。過程はただたんに、たえず先へと進んでゆき、そうすることによって来るべき生成の出発点を、過程のそのつど最後に達成された局面へと持ち込むだけであってはならないのだから、過程のなかに含み込まれた物は、自らの過ぎ去った存在を自らのうちに担い、それでもやはり——生成しつつあるにもかかわらず——生成したのものとしてのみそこにある（この場合、過ぎ去ったものは、もともとはたんに、やがて生ずるものの主体でしかない）、と。というのは、こうした観点からすれば、物はもっぱら常に自分を超え出て存在しているものだということになるであろうからである。物自身は、いわば過去に物であったものと、さらになお物となるであろうものとの配分されていると言えよう。」⁽¹⁵⁾ 生命体は、おのれの出発点のうちにおのれの終結を含む、こうしたいわば螺旋的・循環的・目的論的な運動として過去と現在と未来とを統一しているが、過ぎ去った存在を、たとえ残滓または痕跡としてであれ、おのれのうちに保持する側面は、やがてこの生命体を「記憶」を所持する生命体へと形成してゆくであろうし、未来または予見の必要性はやがてこの生命体を外部環境に対して合目的な反応を形成するまでに高めてゆくであろう。「物体は、過程のうちに含まれるかぎり、『自己』を成果としてもつ。しかし、その意味は今までは知られていなかった。物体とは、それが現にある状態のままにとどまると

いう本質的特徴と、物体自身とは異なったあるものを生み出すという、これとは対立的な、同様に必要とされた本質的特徴との統一だからである。」⁽¹⁶⁾

ところで、生きた存在が過程のうちにある、成長し発展する性格をもつということは、生きたものがおのれの目標に向かって進行することを意味するといわざるをえないが、そのかぎり、生きたものの目的としての形式理念が問題とならざるをえない。ここでわれわれは、生物学史において生命の萌芽からの発展をめぐる問題でひとつの大きな論争点をなしたあの問題、すなわち前成説と後成説の問題に直面することになる。前成説とは、とりわけ発生学の初期に現れた学説であって、生物の個体発生の過程では、完成されるはずの個々の形態や構造が発生の初期に一定のかたちで動物の卵巣または精子のなかにすでにあらかじめ存在していて、それらが成長するにつれて展開されて現実化するという見解をとった。それは、極端な場合には「いれこ説」または「箱詰め仮説」というかたちで知られている。これに対して後成説は、生物の個体発生的発達成長の過程では、生物の諸器官は発生の初期から存在するのではなく、単純な状態から順次より複雑な状態への進展とともに、その過程のなかで器官と器官の構造とが漸進的に形成されるという立場をとる。歴史的には、胚葉の研究が進展するにつれ、古典的な前成説は否定されざるをえなかったのであるが、プレスナーはこれら両説に対していかなる立場をとっているのか。プレスナーによれば、「前成説と後成説とのあいだの論争はどんなに救いがたく成長発展の現象に反するものであるか」を示しており、「両者とも正しく、また両者とも間違っている。」⁽¹⁷⁾ それというのも、成長発達という現象には、発生過程には成長発達の目標という意味での目的因的な側面、すなわち何らかの諸要因によってあらかじめ決定された方向性または傾向性（ヴァイスマンの生殖質説がこれにあたる。これに相当するものは、現在では染色体上に配列されている遺伝子と言ってよいであろう）があるが、他方では発達の各段階においては当初から決定されているわけではない独自の自律的・後生的な規定要因（ドリーシュのエンテレヒーや調和等能性などが言わんとした要因）が連続的に作用するという側面もあるのであって、こうした生命現象の複雑で錯綜した性格は、前成かそれとも後成か、目的・因果的に決定されているのかそれとも非決定かの単純な二者択一を受け入れはしないからである。この点ではプレスナーは事態とその問題点、そして生物学のその後の進展の方向性とを正確に見抜いていたと評価してよいであろう。

ところで、生命体の生きた過程は發育展開 *Entwicklung* という性格をももち、本質的に成長し、また自己分化する。「ある物理的な物体 [肉体] が自らの境界を実現するという、初めに詳述した条件を満たすならば、この物体は發育展開する。進化 *Evolution* とは、過程を継承しながら自分自身に先立って存在する物体がもつ必然的な様式である。」⁽¹⁸⁾ つまり、生物は質的・形態学的・機能的に異なった要素・部分・部分複合体へと内的に分化し、多様性において低次の状態から高次の状態へと移行する。しかし、生物が成長または發育展開する過程は、同時に上昇・絶頂・衰退という形式法則に支配されており、このプロセスは最終的にはこの生物

の死によって完成される。いかなる生物も老化と死という必然的な宿命を免除されはしない。プレスナーはこうした老化と死の必然性をどのように把握しているのか。プレスナーは、これまで流布してきた死にかんする経験主義的な理論とア・プリオリ主義的な理論とのいずれをも一面的だとして退けて、こう述べている。「死は、生命にとっては媒介されないかたちでは外面的で非本質的であるが、発育展開という生命に本質的な形式によって媒介されたかたちでは生命の絶対的な運命となる。」⁽¹⁹⁾「死は生命の彼岸であり、生命にとっては生命そのものからは分離されてはいるが、しかし、生命によって強制された生命の否定である。」⁽²⁰⁾

だが、死にかんするプレスナーの考察がきわめて独特であり、それゆえにまた問題点をも孕んでいるのは、彼がここでまたしても死を境界および位置性の概念と深く関連させている点であることは、彼自身によって「死と生きたものとのあいだの分離 *χωρισμός* は、生命の本質から生じはしないが、肉体とそれの境界がもつ、生命の根底にある関係から生ずる」⁽²¹⁾ ことで明らかである。つまり、プレスナーによれば、生命の絶対的な否定としての死は、生命体がおのれの領野または媒体に対して境界をもつ閉鎖的な生命体として何らかの位置性をとるといふことの法則的な結果として存在するのであって、死はこのこと以外の生命の本質から生じはしないと言うのである。したがって、死とは生命とこれを取り巻く領野とのあいだにもともと存在する「空隙」の完成であり、彼自身の言葉で言えば、生命と媒体とのあいだの絶対的な「空隙法則性」 *Hiatusgesetzlichkeit* ⁽²²⁾ の実現でもある。

ところで、境界および位置性と内的に関係させられたプレスナーのこのような死の理論は、現在の生物学の到達段階からはどのように評価されうるであろうか。われわれは、率直に言って、死にかんするこうしたプレスナーの考察と理論に対してはいささかの違和感を禁ずることができない。なぜならば、ここで簡潔に結論だけを述べておけば、現在ではすでに次の事実がつきとめられているからである。生命体の死には、例えば細胞外の環境条件の悪化などの事故によって細胞が死ぬ壊死（ネクローゼ）のほかに、多細胞の生命体が体組織を形成してゆく過程のなかで行われる不要な細胞の死がある。細胞の自殺というべきこの死の現象はアポトーシスと呼ばれて研究されているが、その成果が示唆するところでは、この場合には、細胞内に必要であればおのれをも破壊するというプログラムが内蔵されているという。研究者たちは、DNAによって制御されているこうした死を「プログラム細胞死」と名付けて、老化とその結果としての死もまた、生命体のうちに寿命を一定の長さに規定するプログラムが遺伝的に内蔵されていることの結果として生ずると考えている。他方ではこれとは反対に、老化と死が必ずしもすべての生命にとって必然的でも宿命的でもないという事実も知られており、例えばいわゆる生物分類でいうモネラ界にぞくする細菌・バクテリア類には死を実行するプログラムは組み込まれておらず、生殖細胞にも潜在的には不死の性質が見られるほか、最近万能細胞として注目を集めている、発生初期の胚性幹細胞（ES細胞）も、そしてまたアメリカの女性から採取されたガン細胞の一種である HeLa 細胞もまた不死である。今から10億年ほど前に出現した

多細胞生物が有性生殖を行って遺伝的多様性を確保し、環境の変化に適応して進化する道を歩み始めて以来、こうした生物が老化と死とを必然とするようになったと考えられている⁽²³⁾。もしも、こうした最近の学説が正しいとすれば、老化と死をもつばら境界と位置性の関係だけによって説明しようとするプレスナーの理論は、やはり時代の制約とそれゆえの限界とを免れることができなかつたと言わなければならないであろう。

(3) 生きた個体のシステム性格、自己調節可能性、調和等能性

プレスナーは以上のようにして有機的生命の動態的性格を展開したあと、今度はその静態的性格の解明に着手する。生命体の静態的性格は、先にあげた生命の二重の方向性または契機のうち、「自らに対向して、自らのうちへと入り込んで」という契機によって構成される。生命体は境界をつうじて周辺領野と位置的関係をもちながら、そして相互作用をおこないながら、おのれを超越する方向性とは反対に、今度はおのれに向き合い、おのれの生命体の内部へと向かう。成長と自己分化をとげた生命体はどの段階であっても、自らの内部に自らの有機体としてのシステムをもち、そしてそうすることによっておのれの中心をもち、したがって「自己」Selbstをもつ。これは先に述べたとおりである。プレスナーによれば、「肉体にそなわっているこの『自己内存在』 das In ihm Sein を明らかにする可能性はひとつしかない。肉体は自分のうちにある中心点に関係する。この中心点は、空間的な場所をもたないが、しかし周囲に境界を設定された肉体領分の中心として機能し、そうすることによって肉体領分をひとつのシステムにするという可能性である。」⁽²⁴⁾ だから、「生きた肉体は諸部分をもつシステムである」⁽²⁵⁾ し、肉体でありながら「自らの肉体に対して関係しながら存在する」⁽²⁶⁾ ようになる。この段階では、生命体の自己はいまだに意識でも、意識の主体でも、まして精神でもなくて、おのれの肉体の諸部分をただ所持 haben し、統一するだけである。

こうして、事物は中心点としての実体的な核心（実在的主体）と性質を担う諸部分または諸側面との二重のアスペクトをなして存立する。「生きた諸事物は、ただ核心のアスペクトのなかで存立したり、『核心』から出て現象したりするだけではなくて、核心的であり、核心具有的 kernhaftig である。この核心は、あらゆる諸部分をそなえた事物を、諸部分の作用統一において所持 haben する。核心は諸性質をそなえたゲシュタルトを所持する。それといのも核心は存在するからである。」⁽²⁷⁾ 事物の中間項 die Mitte とも言い換えられるこの核心は、所持する作用の主体であり、その意味における中心であって、そのような主体としては、空間的・時間的事物に対する関連をもたないわけではないが、しかし、どこかある所にある時に存在するというのではなくて、空間と時間とを自ら主張し、空間のなかに自らを参入させうるものとして、時間的・空間的に存在するすべての諸要素（諸部分、諸要因）を等しく結びつけるような統一機能をもつ。こうした核心または中間項、さらに言い換えれば所持する働きの主体は、システムの全体として、すべての諸部分または諸要素を自らの活動によって統一へと結合する。こ

うしたシステムの全体性の特徴は、とりわけそれが所持する自己調節の現象を分析することで明らかとなる。この中間項または核心、主体が諸部分を自らのうちに統一しているがゆえに維持しうる自己調節可能性 Selbstregulierbarkeit もまた生命特有の現象である。生命体がホメオスタシスとして有するこうした自己調節可能性は、ドリーシュが言うところの調和等能的なシステムとも関係してこざるをえず、ここで再びプレスナーとドリーシュとの関係が問題となるであろう。

周知のように、調和等能系 das harmonische äquipotentielle System という概念を構想したのは、プレスナーの師でもあるハンス・ドリーシュである。彼はウミヒドラやウニの卵分割とその再生などの有名になった実験とその考察から、生物の原状回復または再構成 Restitution という諸現象を説明するものとしてこれを着想したのである。現状回復または再構成とは、例えば受精して2細胞期または4細胞期となったウニの卵の一部を分離・欠損・癒着させてもそれぞれが形態的に完全な幼生を生じるといような、生命の自律的な作用のことを言う。ドリーシュはこの現象を解釈して、卵のシステム内の諸部分が全体のなかで新たな位置関係をとることによって、予定された正常なものへと調整されたのであって、生命体の全体が諸部分のなかに潜勢的に現存していると理解した。そして彼は同時に、決して機械論的過程に還元されはしない、生物学的に独自の性質をもつこうした働きを説明する原理として、エンテレヒーをもちだして、これを自らの生氣論のよりどころとしたのであった。例えば、ドリーシュは彼の主著『有機的なものの哲学』のなかでこう述べている。「われわれが棘皮動物の胞胚と原腸胚から知っている諸潜勢力は『複合的』なものではない。われわれのシステムは、これらの諸要素のそれぞれが、それぞれの個々の役割を全体的なシステムのうちで行われているものの総体性のうちで果たしうるという意味において、むしろ等能的である。『諸状況の機能』というわれわれの表現はこうした個々の機能に関係する。したがってわれわれは、われわれのシステムを、個々の潜勢力をもった等能的なシステム、あるいはもっと簡潔に言えば、『単一的・等能的システム』と名付けることができる」⁽²⁸⁾、と。

すでに述べたように、プレスナーは自然科学的な思考の訓練を積んだ生物学者として、エンテレヒーのような、生物体に対して外部から作用する、それ自体として非物質的な、非力学的な力を想定することを拒否する。しかし、プレスナーによれば、「自己調節の現象の場合には事情が違っている。われわれはまだ自己調節を正確に説明できるという立場にはない。しかし、潜勢力の表明という意味で自己調節を理解することは、ただカテゴリー的な分析にだけ許されている。つまり、『生命』と『生命性』との感得されうる erschaubar 『何であるか性』 Washeit にとって特種な存在層の存在論的な分析にだけ許されていると言ってよいのだが、経験的な分析にとってはそうはならない。」⁽²⁹⁾つまりプレスナーは、生命体の自己調節現象を正確に説明しえない当時の状況のもとでは、調和等能的なシステムが存在しうることを一定の範囲において認めながらも、「有機体の哲学は調節現象の背後で開始されることはほとんどない」⁽³⁰⁾として、

非物質的な要因を経験的な分析のなかに直接持ち込むことに反対し、こうしたシステムは、有機体の境界と位置性から出発して生体カテゴリーを一貫して展開することに努めれば、おのずと与えられると見なしているのである。

(4) 有機的被組織化性と諸器官の意味

周知のように、どんな原始的な単細胞生物ですらも、その生命体の内外に質的に異なったさまざまな諸器官を細胞内小器官として、また細胞膜・鞭毛・繊毛などの細胞外器官として分化させ、これらを結合し調節する統一的な機能を発達させている。多細胞生物の場合には、これに加えてさらに細胞内諸組織と諸器官とがさらに高度に質的に分化して、有機体の生命活動を全体として支えている。もちろん、生命体の諸器官の自己分化・自己差異化は、これらを有機的に結合して組織化されたあり方、すなわち有機的被組織化性 *Organisiertheit* を前提している。ただし、プレスナーのアプローチからすれば、ここでもまた「器官という概念、もしくは事態は、生きた物にとってはア・プリオリに必然的である。」⁽³¹⁾ ここには、無機的な全体性またはゲシュタルトとは異なった要素がある。無機物の諸部分のたんなる総和には還元されえない有機的生命の諸器官は、全体または他者からは媒介されえないゲシュタルト形成者であるとともに、有機的生命の全体へと媒介された統一体でもある。諸器官の特定の部分が破壊または除去されれば、有機的生命は失われる場合がある。無機的生命にはそのようなことは起こらないことは自明である。こうした生命統一は物理学的にはとらえられない、とプレスナーは考える。プレスナーはこう述べている。「諸器官はただたんに有機体を、たとえば階段、部屋、正面、屋根、土台といった構造が一軒の家を形成する（家そのものは、家の諸部分の総和以上のものである）ように、結合するだけではなくて、そのうえ統一としての有機体に関係し、有機体の統一を有機体自身のうちで媒介し、そうすることによってまさにあの全体を構成する。」⁽³²⁾

位置的な性格をもつ物の全体とその諸部分としての諸器官との関係をもう少し詳細に検討してみよう。生きた物はひとつの統一体を形成するが、こうした統一には二重の関係がある、とプレスナーは指摘する。第一に、この生きた物の統一はおのれのすべての諸部分によって代行されているという現実的な関係がある。そして第二に、先に引き合いに出したプレスナー特有の概念を用いて言えば、こうした物、すなわち生きた肉体の中間項または核心がこれらの諸部分を保持するというかたちで、生きた物の統一が代行されているという潜在的な関係がある。つまり、簡単に言えば、中間項または核心または主体という代行する働きは肉体の諸部分を保持することによってこれらの諸部分を代行し、諸部分は再現前化という働きの客体である。この関係は、生きた肉体が唯一のものなかで再現前化という働きの客体であるとともに、中間項または核心または主体という代行する働きによって媒介されて、その主体でもあるという関係である。諸部分は主体から切り離され自立していると同時に、主体に結合され非自立的であるという弁証法的関係がここにある。

例えば、植物は葉・根・茎などの諸器官をもち、動物は眼・手足・尾・毛皮などの諸器官をもつが、これらの諸器官は一方では、全体に欠かせない諸部分としてともに有機的生命の統一を条件づけている。これらは他方では、たんにそうしたものとどまらずに、全体から引き離すことができ、全体の外に存立するものでもある。器官によっては、これをたとえ失うことがあっても、全体としての有機的生命は失われることがないからである。もう少し詳細に考察すれば、ここには、諸器官は肉体とのかかわりでは、まず1) 単純な諸部分であり、次に2) 自己としての肉体が保持する諸分肢であり、さらに3) 肉体の諸手段であって、これら諸手段が肉体を全体性へと媒介する、という関係がある。プレスナー自身の言葉で言えば、「生きた肉体は、ただ諸器官によって媒介されてのみ中心性なのであって、これら諸器官がなければ、生きた肉体はもはや生きることができない。」⁽³³⁾

ところでプレスナーによれば、「生きた肉体の全体は、媒介されないかたちでそれ自身、自らの諸部分のうちに潜勢的に現存している。代行というこの肉体の形式は、調和等能系と呼ばれる。しかし、全体はそれ自身媒介されたかたちでも、自らの諸部分のうちにアクチュアルに現存している。代行というこの肉体の形式は、特殊化された諸器官の調和のとれた拡散という状態にある。」⁽³⁴⁾ ここでも生きた有機的生命の本質的な二重アスペクト性が現れているとプレスナーは言う。つまり、媒介されない潜勢的状态と媒介されたアクチュアルな状態との二重性である。こうした二重アスペクト性は、一言で表現すれば、「媒介された無媒介性」ということになる。それゆえにプレスナーは、「生物というものは、器官というかたちで自らの手段をもっている。つまり、生きるための手段である。全体は、生物の肉体のうちで、全体へと媒介される。有機的な肉体の『自己内被措定性』 die In ihm Gesetzmäßigkeit は、現実に媒介された無媒介性である」⁽³⁵⁾と見なしているのである。

有機体もっている潜勢力が諸器官の発達と分化によって現実化され、多様性を獲得していくにつれて、有機体は中心への収斂を失い、順応能力と調節能力をしだいに弱めてゆくが、こうした生命の展開はその生命自身の時間、すなわち年令の諸段階の変化であり、死へといたる萌芽でもある。こうして有機体の諸器官の多様な分化と有機体を取り巻く環境の諸要因とのみごとなまでの結合と統一とが構成されるのだが、かつてユクスキュルは、ポルトマンと同様に、こうした合目的な構成計画を、生命または世界を超越した世界形成者の秩序付けに帰したことがある。しかし、プレスナーはユクスキュルのような説明方式は採用しない。彼はあくまでも科学的な生物学者として、生物の構成計画の豊かさを生物自身を原因として説明しようとする。「構成計画の豊かさは、構成計画の法則性一般からは展開されえない、ということは正しい。…有機的なものが実現される開始点には、絶対的な任意性の契機があって、この契機の本質上必然的な働きは、有機組織の原型がそなえている非合理性を表示している。この戯れのような随意という本質的特徴がなければ、生命はもはや生命ではないであろう。」⁽³⁶⁾ かくして、「生命ある物理的な物は、秩序をつくりだす諸条件をそれ自身のうちに担っていて、これらの諸条

件は、戯れそのものの開始とともに、これを促進したり抑制しながら、戯れのなかへ入り込んでくる」⁽³⁷⁾のである。

第4章 開放的形式をもつ生命としての植物の位置性

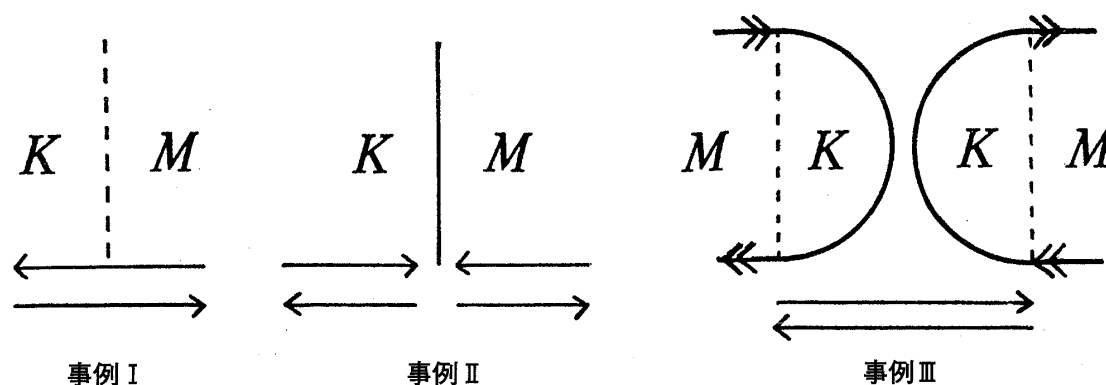
(1) 有機組織と生命圏

すでに先立つ諸章において述べたように、生命ある有機体は有機的に組織された生命体として自らの諸器官をもち、これらの諸部分を通じて媒介された統一的な全体である。諸器官はこの統一的な全体の一部として、全体の手段をなすとともに、全体を再現前化 Repräsentation してもする。プレスナーによれば、肉体としての生命体の全体と諸部分とのあいだのこうした関係には、三つの論理的レベルまたは契機が区別されるとともに統一されている。まず第一のレベルは、肉体を所持する全体の自立的な統一であり、核心または肉体を所持する主体という契機である。これは、諸部分または諸器官の多様性の統一の外に、一者としてある契機である。第二のレベルは、客体、すなわち全体によって所持され使用される手段としての諸部分の契機であって、たんなる機械的総和を超えた、諸部分の多様性のなかの作用統一でもある。第三のレベルは、それぞれの諸部分または諸器官のなかの統一であって、調和等能的なシステムといってもよい契機である。ここには、所有者または使用者としての有機体はじかに現れることがなく、諸部分または諸器官は、主体としての有機体の自立的統一と諸部分の多様性のなかの統一とを媒介して有機体全体の統一へと結び付ける。「生命とは器官へと媒介されながら存在することをいうのである。」⁽³⁸⁾この意味では、諸部分は「純粹な貫いて行く働き」 das reine Hindurch である⁽³⁹⁾。したがってプレスナーは、生氣論的に、有機体を生命過程に随伴して働くたんなる機構と考えることも、機械論的に、全体と諸部分とをただちに同一視して有機体がたんなる機械的な機構と考えることも、両方とも一面性の誤りを犯していると思なすのである。こうして、次のような有機的生命にかんするプレスナー的な特徴づけが得られる。「生命とは全体の媒介された無媒介性である。もしも、物理的な有機体が生きたものであり、生命のための手段であるとすれば、すなわち、物理的な有機体は自分、生きたもの、生命のあいだの区別を自分から物理的に行うとすれば、こうした有機体にとっては、自分自身の一手段でありながら、そのことによっておのれの内的目的論がもつ自己充足性を放棄したりはしない、ということが可能である。」⁽⁴⁰⁾と。

ところで、先立つ諸章ですでに述べたように、そしてまたユクスキェルが詳細に研究したように、有機的生命はそれの周囲の環境世界、プレスナーの用語で言えば、位置領野 Positionsfeld と密接に接触しながら、おのれの生命を維持せざるをえず、こうして位置的關係のうちへと入り込む。有機的生命と位置領野とが交差しあうこうした場面こそ、生命の循環が行われる生命圏 der Lebenskreis にほかならない。「生きた肉体は、諸器官が開放的であって、自己を開放す

るところのものによってある機能環を形成するかぎり、おのれの器官のなかで自分から外へ出てゆき、また自分へと戻ってゆく。諸器官は位置領野にたいして開放的である。それだから生命圏が生ずるのであって、この圏の半分は有機体によって形成され、他の半分は位置領野によって形成される。」⁽⁴¹⁾有機的生命体は、諸器官をつうじてのみ外界に開放され、外界と接触し、生命圏へと組み込まれる。「生きた肉体は、境界の担い手として、『あいだ』および『あいだ』の橋渡しとして、異質の圏域を固有のそれから切り離し、そうすることで両方の圏域をたがいに結び付ける。」⁽⁴²⁾有機体は、こうした生命圏のなかで、同化・異化、適応と被適応などというかたちで周囲とのあいだで物質代謝を営まざるをえず、こうして物質とエネルギーの普遍的な連関と循環のなかへと入り込む。

こうしてこの段階で生ずる有機体と周囲環境、言い換えれば媒体との普遍的な連関は、プレスナーによれば、以下のように図示される⁽⁴³⁾。



ここでもまたプレスナーの説明は簡略にすぎてきわめて理解困難であり、具体的なイメージをすぐに思い浮かべることができない。(そのためか、きわめて不思議なことに、プレスナー研究の大著を著したシュテファン・ピエトロヴィッチはこの図式とそれにかんする説明・解釈とをまったく省略してしまっている。)しかし、事例 I が無機的な事物どうしの関係を表現しているのに対して、事例 II・III とは生命圏における肉体とこれを取り巻く周囲の媒体とのそれぞれの関係を表現しようとしていることが推測されるであろう。これをできるだけわかりやすく解釈してみよう。

まず事例 I では、無機物的物体とこれを取り巻く周囲の媒体との関係が示されていて、物体が生体膜に代表されるような生命体特有の明確な境界をもたない(したがって、この境界は仮定的な境界であり、それゆえに実線ではなく点線によって示されている)がゆえに、媒体は無機物的物体にストレートに作用して無媒介に働きかけるし、無機物的物体もまた周囲の媒体に対してそうした無媒介な関係をとるであろう。ここには阻止したり、逃避したり、あるいは選択的に浸透したりするという関係は存在しないであろう。

これに対して事例Ⅱでは、生きた有機体と周囲の媒体とが関係が示されており、これら両者が反対方向で関係しあうことが図示されている。ここでは生きた肉体（物体）は自らがもつ境界によって周囲の媒体と接しているが、生体膜に代表されるこうした生命体の境界そのものは、周囲の媒体がこの肉体（物体）に対して直接無媒介に作用することを不可能にしている。ここでは、事例Ⅰのように、物体と周囲の媒体とが直接に物理的な影響を及ぼすことはなく、肉体は媒体に対して閉鎖的な関係にあるから、肉体は自らに迫ってくる周囲や周囲の刺激に対して対抗することもできるし、これとぶつかりあうこともできる。しかし、他方では肉体は周囲の媒体から身を退けて遠ざかり、さらに媒体からまったく逃避することさえ可能である。こうした肉体と媒体との関係をプレスナーは「絶対的な反対方向（意味）性」die absolute Gegensinnigkeitと規定している。こうした関係と、先立つ章で示された、境界をそなえた肉体と媒体との関係とは、おたがいに重なり合わされており、いずれも肉体と媒体との関係がもつ二重の側面を表しているであろう。

それでは事例Ⅲではいったい何が図示されているのか。おのれのうちに閉ざされた肉体は、周囲の媒体とのあいだでただたんに対抗的・反対方向的な関係にあるだけでなく、器官をつうじてある意味では周囲の媒体に対しておのれ自身を開放している。周囲の環境に対する閉鎖と開放の仕組みは、例えば同化と異化というようなかたちで、肉体と媒体との物質代謝過程として現れる。もちろん、これは生命の最も基本的な活動であり、しかもひとつの生命圏にぞくするそれぞれの有機体すべてが、そうした生命活動を営む固有の圏域をもっている。肉体Kが環境媒体Mの諸要素を例えば栄養摂取というかたちで自らのうちに取り込んで自己を合成するとともに、肉体Kからも媒体Mに対して例えば排泄に代表される異化的作用を行い、そうして物質どうしを循環させるとともに、他の有機体とは区別されるおのれの活動の圏域を形成するということが、事例Ⅲの二重の矢印をもった曲線によってそれぞれ示されているであろう。ひとつの有機体にたいしては、もうひとつの有機体と同じ活動を展開し、このふたつの有機体のあいだにも相反する矢印で表現される相互関係が成立するであろう。生物の論理学のこの局面では、おのれのこうした圏域を形成する生命体が植物であるか、それとも動物であるかには、まだ無関心である。ここでは生命はまだ普遍的に考察されている。事例Ⅲに示されているふたつの圏域のうち、やがてそれぞれが周囲環境に対してとるさらに進んだ位置性と有機組織化された内部構造とにしたがってそれぞれの構造が豊富化され、やがていずれかの有機体が植物となり、動物となっていくであろう。

同化と異化の作用について、プレスナーはこう述べている。「同化と異化とは、物質代謝、エネルギー代謝、形態変化の分野では、生きた個体の自己維持の全機能が含まれているある循環過程の局面を規定する。自己維持は必然的に自己放棄と自己破壊とに結びついているが、それは、肉体の圏域が内的な対立と浸透していく分裂という前提のもとでのみ、周囲の自然の異質の圏域と持続的に接触するからである。ここに含まれているのは、生きた実体の不安定なバ

ランスとも名付けられうるものである。」⁽⁴⁴⁾「生きた個体の自己維持は、同化的過程と異化的過程との対抗関係にもとづいており、それゆえに両者そのもののどれとも同じではない。したがって、萌芽から死にいたるまでの生命の全経過の不可逆性と生命の横断面のサイクル性とのあいだには、まったく何の矛盾も存在しない。」⁽⁴⁵⁾こうした同化と異化の過程をつうじて、有機体は周囲の環境領野との共存と対抗との関係を生きるなのであって、生命が位置的關係をとらざるをえないこうした領野は、かつてユクスキユルが反対構成と名付けたように、プレスナーによっては反対領野と呼ばれる。「有機体に『とっては』、おのれの生命の反対領野 das Gegenfeld が存在するのであって、有機体はこの反対領野のなかに現実存在する。つまり、この領野とは、有機体がそれとともに生き、そしてそれに対抗して生きる一領野である。」⁽⁴⁶⁾こうした規定のうちには、生命そのものの生得的な不安定性が早くも姿を現しており、これがやがて人間存在の不確定性・不確実性へと発展していく実存的契機をなしている。もろもろの有機体がおのれの反対領野とのあいだで織りなすこうした生命活動が多様に展開される場が、プレスナーの言う生命圏とそこにおける生命の循環過程とにほかならない。

(2) 適応, 生殖, 遺伝, 選択

プレスナーは、生物が固有の性質としてもつ境界と位置性の概念から、次々と生命活動を可能にする諸条件を取り出して解明していくのだが、植物と動物が生命一般として共通にもつそうした諸条件を、経験的な研究を踏まえながらも、直接にこうした成果を混入させることなしに、あくまでも論理的・演繹的に、彼自身の言葉で言えばア・プリアリに導出しようとする。同化と異化の概念が検討されたあとで、適応, 生殖, 遺伝, 選択などの生体諸カテゴリーが次々と取り上げられ、分析されて行く。

すでに述べたように、境界によって周囲環境から閉ざされたシステムとしての生命体は、周辺領野によって取り囲まれて、有機体と媒体とのあいだに設定される反対方向的な諸関係のうちで生命活動を維持する。したがって、こうした関係のうちに入り込むのは、適応 *Anpassung* と被適応性 *Angepaßtheit* の概念である。プレスナーによれば、有機体と環境とのこうした関係のうちにはさらに、一方では有機体が厳密に環境と環境の変化とに順応してこれになじみ、あたかも金属が鋳型のなかにはめ込まれるように、「静態的に見れば形態システムと機能調和として、動態的に見れば発達, 調整, 機能転換として」⁽⁴⁷⁾環境に適応させられているという、有機体から見れば受動的な関係としての被適応性と、そして他方では、有機体がひたすらおのれに対抗して立ち向かってくる不意打ちの領野としての環境世界に対して、適応をめざして絶えまなく努力するという、有機体からみれば環境に対する能動的な関係としての適応とが析出される。これら両者は、有機体と環境媒体とのあいだでとり結ばれる可逆的な反対方向の関係にほかならない。

こうした矛盾に満ちた生命体と環境との関係をとらえようと努力してきた生物学者のこれま

での考え方は、とかくこの適応と被適応性という両極端のいずれかを二者択一的に選択して、いずれかに固執するということを繰り返してきた、とプレスナーは考える。被適応性だけを主たる要因と考える立場からは、ユクスキュルのように生物世界の出来上がった機能的な合目的性・構成計画性だけを強調するとすれば、生命体が任意性、個体的自主性、予見不可能性、偶然性、したがって失敗の可能性という要素をもちえないかのような結論が出てきかねないし、また一面的なラマルキズムやダーウィニズムが出てきかねないであろう。しかし、プレスナーによれば、「排他的な被適応性（順応性）にかんする学説も、排他的な適応にかんする学説と同様に、生命というものは本質的にこれら被適応性と適応との両者であって、両者を生命のために用いている、ということをおぼえている。」⁽⁴⁸⁾つまり、生命が環境にたいして原初的に適応させられているという関係と、生命が環境に対しておのれの生命力を発揮してこれに自らを適応させるという関係とが統一的にとらえられなくてはならない、というのである。生物の位置形式に注目するプレスナーの見解はこうである。「有機体は、それが位置領野にたいしてとる同一方向の立場の場合には、領野のひとつの内容を形成する。すなわち、有機体は、領野とともに、可逆的に反対方向の（物理・化学的な）諸関連をもち、森羅万象のなかで、原因と結果が浸透しあう連鎖へと組み込まれる。有機体は、位置領野にたいしてとる反対方向の立場の場合には、領野へと配分されており、全体として領野と重なり合うすべてに対しては、刺激と反応の不可逆的に反対方向の諸関連のなかにある。つまり、お互いにたいして適合しあう働き、お互いに対して影響しあう働き、個体的な応答、特種化された調和といった諸関連のなかにある。」⁽⁴⁹⁾

ここでプレスナーは、「有機体と媒体とのあいだの不安定なバランス」⁽⁵⁰⁾を考察しながら、生物の能動的適応を主張したとされるラマルク主義者とこれに対して受動的適応を主張したとされるダーウィン主義者の双方を批判的に検討しながら、こう主張する。「彼らは、有機体と媒体との関係全体を適応という観点のもとにすえようとし、おまけに、生命と生命領域とのあいだの原初的な調和が前もって与えられているということをおぼえてしまったが、この調和はそれ自身またしても適応の諸事象の結果として考えられてはならないのである」⁽⁵¹⁾、と。もちろん、プレスナーが彼の言う生命と媒体とのあいだの「原初的な調和」に言及するからといって、先に述べたように、彼はユクスキュルのモノドロジー的で反進化論的なユクスキュルの理論を全面的に承認するわけではない。しかし、プレスナーは、適応と被適応性にかんする学説の両者に対して調停的な態度をとりながら、どちらの言い分をも一面の真実を言い当てたものとして認めようとしながらも、有機体と領野との適応および被適応性の関係を、あくまでも自らの理論の中核である位置性から導出しようとし、さらにその立場から生命と環境とのあいだの「原初的な調和」に言及しているのだから、実際には結果としてダーウィンの適応理論を否定しかねない立場に近づいているといわざるをえない。次節で論ずるように、生物の変異の存在、自然選択、その結果としての適応という基本的観点から生物の系統発生的進化を考察す

る視点をもたないかぎり、あるいはこの視点を曖昧なままにしてこれとは相反する見方をこれに混入させるかぎり、進化論に対する否定的な見解を帰結せざるをえないであろう。また、プレスナーが適応という概念を自らの位置性の理論のうちに位置づけながらも、すでにわれわれが検討したように、適応の諸現象を原状回復とともに有機体のたんなる自己調節の諸現象のうちに組み入れていることも、適応がもつ進化論的に重要な意味をきわめて希薄なものにしていると言わざるをえないであろう⁽⁵²⁾。

さて、プレスナーによれば、有機体の構造のなかでは「肉体は、おのれのうちへと入り込んでいるとともにおのれを超えて存在するこうした肉体として、おのれ自身に先行しており、このことによって現在のである」⁽⁵³⁾のと同様に、有機体と媒体または領野とのあいだにも、後者が前者に対して先行するという関係がある。「有機体は、背景、つまり非現在のなものが自分に先行している限りにおいてのみ、環境に取り囲まれている。有機体は『先行して』Vorweg というこの構造を生きていて、それゆえにこの『先行して』は、特別に有機体から流出していくような予期的な行いを必要としはしない。」⁽⁵⁴⁾そして、このような考え方の上に立って、プレスナーは、生きた肉体が領野のなかに、領野とともに、領野に対立して置かれつつ、「安らぎと闘争のはざまに、生と死のうに——現実存在しなければならない。だから、生命とは危険のなかにあることだと言われ、現実存在とは冒険を行うことだと言われるのである」⁽⁵⁵⁾と述べて、適応と被適応性との関係を、有機体が周辺領野と対決しつつ行う先取り、つまりリスクにさらされる生命の行いのうちに組み込んでしまう。プレスナーは、先行所与的な「生命と生命領域とのあいだの原初的な調和」、そして「リスクというこの本質的な性格が初めて、生命の行いによって実現される被適応性、もしくはこれを超えて進んでゆく適応を可能にする」⁽⁵⁶⁾という叙述に見られるように、先行構造や先行所性などのフッサールの概念を用いながら、そして有機体の行動と主体性ともいうべき契機を強調しながら、「生命の本質のうちに含まれているのは、任意性のあの契機であって、合理的な洞察は、形式形成のなかで、すなわちあるタイプの計画形成のなかで、この任意性の契機が及ぼす影響を解明することは絶対にできない」⁽⁵⁷⁾と述べている。

さらにプレスナーは、以上のようなアプローチの延長線上に、生殖 Fortpflanzung、遺伝 Vererbung、選択 Selektion の概念を位置づける。有機体が物質とエネルギーの代謝によって形成された生命循環のなかでおのれの有機組織を用いて現実性と接触するということは、同時に生物が現在という時間的様相において生きるということをも意味し、このことはまた生きた個体が老化と死という不可逆的な過程のうちにあるとともに、また未来へと関連づけられているということをも意味する。だからプレスナーはこう言うのである。「個体は、未来に基づけられながら、生成、或るものへの生成、発育展開を体験しながら、おのれの死を迎える。したがって、おのれの現在の本質に一致するような位置領野は未来に対して開放的であって、個体は未来へと関連づけられている」⁽⁵⁸⁾、と。しかし、生きた個体が老化と死によって絶対的に

境界づけられているのだから、老化と死は物質とエネルギーの循環と生命の適応過程とを決定的な仕方で脅かすことになり、ここには基本的な困難が生ずることになる。それゆえ、有機体は老化という不可逆的な傾斜に対抗して、これに「若返り」Verjungung⁽⁵⁹⁾を対置しなければならない。

また、こうした個体の若返りは、代償的な更新というかたちをとって、つまり生殖によって自らの遺伝を受け継いだある他の個体のうちで若返ることもできる。それというのも、プレスナーによれば、「内的な必然性をともなった発達は、個体のなかで進んで行って死にいたるが、そのためにもろもろの個体の連鎖が存在しなければならず、この連鎖は生命にもとづく生殖質の持続のなかに類型をもつようになる。準備基金はこのようにして形成されているのであって、それは損なわれることがなく、種の維持に…役立つ」⁽⁶⁰⁾のだからである。こうして個体と類または類型とのあいだには、系統または連鎖の関係が生ずるとともに、同時に空隙、不均衡、緊張の関係もまた存在するのであって、ここに可能性の選択という調整が行われなければならない。

プレスナーによる有機体の理論の体系的展開はこのようにして進行して行くのであるが、生命とその活動にとってきわめて基本的な要素であり、今日現代の生物学研究の最大の焦点ともなっている生殖・遺伝・淘汰〔選択〕などの諸概念がもっぱら有機体の境界と位置性というきわめて限定された視点からアプローチされているために、内容的に見ても貧弱で、全体として精彩を欠いており、率直に言ってあまり興味と関心をそそられるものとはいえないであろう。私には、これらの重要なテーマにかんするプレスナーの叙述が、われわれの探求の対象となっている彼の主著『有機的なものの諸段階と人間』455頁のうちわずか7頁強にしかさかれていないというたんなる形式的事実もまた、当時の生物学の到達段階の時代的制約だけでなく、彼のこうした視点と方法を応用し適用する狭さと限界とを端的に物語っているように思われてならないのである。

(3) 進化論とダーウィニズムの評価をめぐって

ここでわれわれは、プレスナーと進化論との関係について簡単にふれることにしよう。なぜならば、上述した意味において、プレスナーの哲学的人間学と位置性の理論を全体として評価するにあたっては、これと進化論との関係という問題を決して素通りすることはできないからである。それは、プレスナーが、適応と被適応性という問題に自らの位置性の理論を関係させながら、ゲートを取り上げている箇所でも明らかである。彼は、例えば「適応もしくは被適応性もつ内的可能性の謎はそのようにして解決されるが、それはゲートが、眼は光にもとづいて光のために形成されると述べて、直観的に理解していたような意味においてである」⁽⁶¹⁾と述べて、ゲートを引き合いに出している。確かにゲートは、「骨学にもとづく比較解剖学総序説第一草案」で、「ところでこのように〔動物が〕多様な姿をもちうる原因をたずねる人がい

たら、さしあたりこう答えておこう。動物は環境によって、環境にたいしてつくられるのであって、動物の内的完全性と外にたいする合目的性はこの点に由来している」[傍点筆者]⁽⁶²⁾と述べ、さらに『色彩論』の冒頭部分でも、新プラトン主義のプロティノスを念頭に置きながら、いわばその具体的な例として内なる光と外なる光の同等性または一致という、多分に神秘主義的傾向を秘めた自然哲学的な思想を述べたことがある⁽⁶³⁾。

プレスナーがこの箇所と言おうとしたことはおそらく、ゲーテの思想がすぐれた着想に導かれながらも、ゲーテが取り上げた主題が自分の言う位置性の観点から新たに照明をあてられないかぎり、その真の意義が理解されないままにとどまるということにあったであろう。言い換えれば、位置性の観点からゲーテの思想に一定の修正を加えるならば、その思想の意義が真に理解されるということでもあったであろう。しかし、生命が環境によって触発されつつ環境に対しておのれの器官を形成するというこの考えは、生命の内発性を強調するとともに合目的性の観点をも持ち込むものであるから、進化論とは本質的に相いれないであろう。ゲーテのこうした思想に親近感をもち、「生命と生命領域とのあいだの原初的な調和」と有機体の冒険、任意性、リスクを強調するプレスナーの見解もまた、そうなのである。なぜなら、「位置性は、有機体の側にすでに出来上がっている器官装備を仮定しなくても、世界にふさわしい諸器官と諸機能の発達を可能にする…」⁽⁶⁴⁾という叙述は、「適応を行う心的または自然的諸要因を仮定することを不要にしている」⁽⁶⁵⁾という叙述と相俟って、ここでもプレスナーが適応を位置性に還元していることで進化論と衝突しかねない側面が示されているからである。プレスナーによってまず第一にわれわれに示されるべきであったのは、有機体と周辺領野との「原初的調和」なるものの存在を仮に容認するとしても、この調和がいったい何に由来し、いったい何によって形成されるのかという根本的な問題に対する説得的な回答であろう。こうした根本問題を不問に付したうで、植物と動物とを位置形式の相違によって分断するとすれば、植物から動物への漸進的進化の道筋を解明しようとする問題意識だけでなく、こうした問いすらもその発生する余地を奪われてしまうであろう。

もちろん、ダーウィニズムに対する誤解・偏見・無理解はプレスナーに限られたことではなく、「哲学的人間学」という思想潮流を一貫して流れており、その創始者であるマックス・シェーラーも、アルノルト・ゲーレンもまたそうであった。さらに、プレスナーに大きな思想的影響を与えたユクスキュルやドリーシュなどの専門の生物学者でさえもそうだったのである。例えばドリーシュは、「ダーウィンは、まさに科学の典型であり、個人的な関心に左右されない人物であって、ドグマとはほど遠かった。しかし、『ダーウィン主義』は純粋な私たちのドグマ主義である」⁽⁶⁶⁾と断定したし、またユクスキュルは『理論的生物学』のなかでこう述べている。「今生きている動物の系譜を予測するさいに、それらの子孫との相同を前提するのは自明のことであろうし、その限りにおいて、起源を規定するために形態学的な構成法則を用いることは正当である。だが、ダーウィニズムがこうした諸法則でやらかす悪用はまったく拒否されるべ

きである」⁽⁶⁷⁾、「ダーウィニズムの論理的な帰結は、それがももつづいている諸事実と同じようにいっそう正しいことが望ましいとされている。ダーウィニズムは学問というよりも宗教である」⁽⁶⁸⁾、と。しかし、進化を偶然の所産と見なし、世界を物質化し、きわめて疑わしい学説を流布したとしてユクスキュルによって非難されるダーウィニズムよりも、「もろもろの種を特殊な創造の所産として理解するならば、正しく信じることになる」⁽⁶⁹⁾と主張したユクスキュルの方が、生物の環境世界を探究するうえでの功績はありながらも、生物が知覚世界と作用世界によって外的世界と連結されているという機能環の図式を固定的に理解することに固執した点で、生物学の哲学的基礎づけの面で問題があったことは事実であろう。そして、有機体と環境領野との関係を位置性の原理から解明しようとするプレスナーの観点と発想それ自体、ユクスキュルのそれにきわめて接近したところに位置しているのである。

プレスナーは『有機的なものの諸段階』のなかでは、必ずしも進化論、ダーウィン、ダーウィニズムに対して公然とした批判を展開しているわけではない。その第1章の、とりわけ冒頭部分にはっきりと現われているのは、プレスナーが当時の「進化主義的イデオロギー」に対してきわめて批判的であるということであり、これを超越する原理として彼はこれに「生」を対置したのであった⁽⁷⁰⁾。しかし、プレスナーはダーウィンとダーウィン主義そのものにも無関心であって、少なくとも進化論的な見方を『諸段階』のなかに取り入れようとは決してしなかったことは、この著作の本文のなかに進化 Evolution という術語がまったく積極的なかたちでは位置付けられていないということを見ても明らかである。進化という言葉は、この著作の第二版の刊行のさいに付された「補遺」のなかに久方ぶりに登場するが、それも生物学の著しい進展を回顧して、それとのかかわりからでしかない。プレスナー自身がそこで率直に「したがって、この書物は、最近数十年に放射性炭素による方法と精密な遺伝学の助けで著しい進歩をとげた系統発生にかんするいかなる討論をも断念している」⁽⁷¹⁾と述べているとおり、進化論的な思考と発想はプレスナーの問題関心のうちにはそもそも存在しなかったのである。

ところでプレスナーは、第二次世界大戦後の一九六一年になって、つまり『有機的なものの諸段階と人間』を出版した後、現代生物学のめざましい発展によっていわば強制されてダーウィニズムに対する彼自身の以前の評価をやや緩和させたと考えられる時期になってもなお、「ダーウィニズムは、遺伝学や突然変異説や環境世界研究の側からの重大な異議にもかかわらず、一世紀全体にもわたって自己を主張することができた。形態を決定する力としての適応と淘汰については、依然として反論が寄せられている。…たしかに淘汰の全能という根本理念を弁護する専門家はもうほんのわずかである」⁽⁷²⁾と述べているし、さらに「ダーウィニズムの公理とはどういうものか。ダーウィニズムによれば、自由な競争がすべての生物を強制して、できるだけよい合目的性という原則に従った、できるだけよい適応を求めての競争に赴かせる」⁽⁷³⁾と述べて、依然としてダーウィニズムと進化論にたいする反対と無理解とをあらわにしている。しかし、ダーウィンの進化論は進化の合目的性を否定したところにその真骨頂があるのであ

て、こうしたプレスナーの叙述がダーウィニズムの核心を全くとらえそこなっていることに、われわれは大きなとまどいを禁ずることができない。さらに、かつて生物学者であったはずのプレスナーが、ダーウィニズムに対する反証として、「とうの昔に過ぎ去った地質時代に発生してその時代に主要な地位を占めたことのある太古の種のなかに、いまだに生き永らえているものがあるという事実」⁽⁷⁴⁾を挙げ、さらに「生存という同一課題に対するさまざまな解決策が等価であると同時に、すでに最初からそれぞれ方向を異にしているという可能性、つまりさまざまな型の合目的性と多様な予定的形態とが併置されているという可能性」⁽⁷⁵⁾と述べて、自らの生物学研究がもはや系統発生的思弁とは無関係であることを自負したユクスキュル環境世界の構成計画に酷似した考え方を提起していることは、やはりわれわれを失望させるものである。こうしたダーウィニズムと進化理論にたいする軽視と過小評価、無理解、その否定的見方は、本論がこれまで述べてきたように、おそらく位置性にかんするア・プリオリ主義的な方法論およびアプローチと並んで、プレスナーの哲学的人間学の体系の最大の弱点のひとつをなしているであろう。

(4) 植物の位置形式

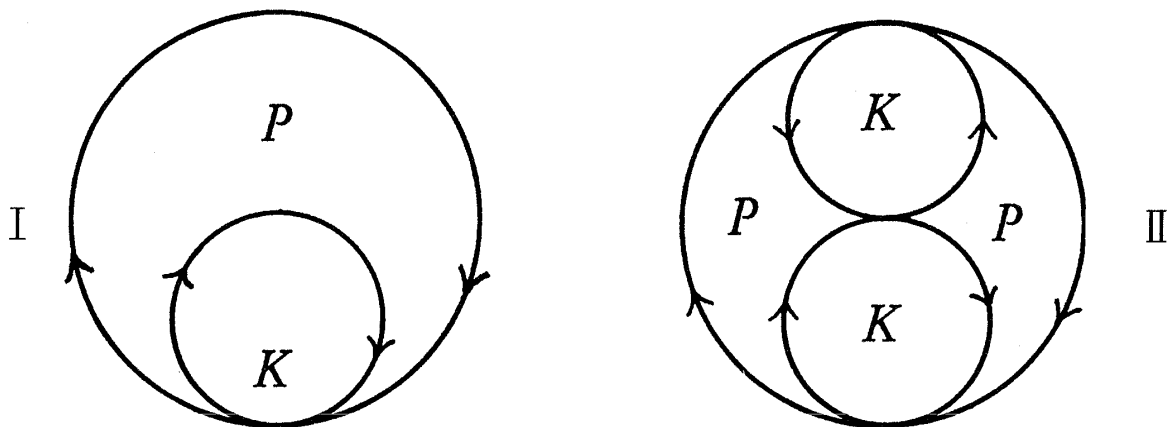
プレスナーによれば、有機体と有機体を取り巻く媒体、すなわち環境領野との密接な相互的關係のうちのみ有機体はおのれを統一しており、有機体はこうした関係を保持しながら、媒体とのあいだには完全に一致しえないという不均衡または空隙をもつことになり、ここに有機体と媒体とのあいだには「そのようになるかも知れないが、しかしそううまくはゆかない」⁽⁷⁶⁾という、緊張にみちた、そして両者の一致へと向けて行われる調整という働きを要求するという内的な構造法則が存在することになる。こうした有機体の在り方のなかには、やがてこれから多細胞以上の有機体が必然的に分化をとげてゆかざるをえないふたつの相反する方向性が析出される。それは、「物理的肉体としての閉鎖性 Abgeschlossenheit への強制と、有機体としての開示性 Aufgeschlossenheit への強制とのあいだのラディカルな衝突」⁽⁷⁷⁾である。後者へと向かう有機的理念の実現が植物の位置形式であり、前者へと向かう有機的理念の実現が動物の位置形式である。

開放的な形式と閉鎖的な形式という区別を用いて植物と動物との有機的組織を区分したのはハンス・ドリーシュであった⁽⁷⁸⁾が、プレスナーは、このふたつの形式の区別がそれぞれが周囲の領野にたいしてとる位置形式の根本的相違として、これを原理的区別にまで高めている。プレスナーによれば、植物と動物との区別を、純粋に経験的に行おうとすれば、さまざまな移行諸形態、中間形態が出てきて、大きな困難に突き当たるのだが、彼が主張するような位置形式に注目すれば、ア・プリオリな観点から植物と動物の区分を行うことができるのである。彼は次のように述べて、またしてもア・プリオリ主義的な自らの信念を吐露している。「植物と動物との区別は、経験的な諸徴表によっては、本質適合的に行われはしない。両者の差異は、

十全な実在性のうちでは観念的である。開放的な形式と閉鎖的な形式とは諸理念であって、現実の生きた肉体はこれらの理念にしたがって有機的でなければならない。生きたものは、有機的なものの道を歩んでゆけば、これらの理念のなかへと歩み入ってしまう。経験的なもののなかに植物界と動物界とのあいだの境界線を見い出すことはできない。(79)

さて、プレスナーは植物について「有機体をそのあらゆる生命発現において無媒介にその周囲へと組み込んで、有機体をそれに対応する生命圏の従属的な部分とするような形式は、開放的である」(80)と述べて、植物と動物の区別を際立たせている。植物には動物のような神経組織とこれを統一的に結合する中枢神経系などの特殊な組織または器官が欠如しているが、そのために栄養摂取や刺激の伝達は植物の全体を浸透して行われる。またこのことは、植物の諸器官がそれぞれの諸部分の高度な自立性を保ったままであり、諸器官からすればそれぞれが自立的な個体として植物全体に外的な契機として加符番的に結合されていることを意味しもある。例えば、植物の茎の成長は根に相当する部分の上に積み重ねられるようにして行われ、成長点は昨年の上段階のうえにさらに付け加えられるようにして新しく成長した組織を積み重ねてゆく。昨年成長した部分と今年成長した部分とが融合することなく、積み木のように相互に自立的に積み重ねられる。まさしく植物は「分割体」なのであり、ドリーシュの卓抜な表現を用いて言えば、植物は $G = A + B + C + D + E + F + \alpha$ である。十分な「個性性」は植物によってはまだ実現されていないのである。

さらに植物は周囲の環境にたいしては、例えば植物の種子が風に吹かれて、すなわち風まかせで周囲のいたるところに飛んでゆき、幸運な種子が偶然性によって自らの生息場所を見いだすように、平面的な広がりへと向かう傾向をもつ。ここでは植物が主体ではなく、周囲の環境が植物に対しては主体として振る舞い、植物はその従属的部分であるにすぎない。植物が空間に広がる場合のこうした他律的・受動的・非主体的な在り方は、動物と鋭い対照をなす。このことは、植物的有機体が生命活動を営むうえで無媒介に自らを取り巻く環境領野に組み込まれてもいることを指示している。プレスナーは例によって、植物と動物のこうした位置形式の相違を、次のようなふたつの事例を図示することによって示そうとする(81)。



この図示された事例をできるだけわかりやすく、私なりにパラフレーズしてみよう。

これまでに図示されたふたつの事例の場合と同様に、記号 K は Körper 肉体を、P は Positionsfeld 位置領野を表わし、K と P との領域を囲むそれぞれの円い線は生命圏 Lebenskreis を表わす。円い線で囲まれているそれぞれの生命圏は、位置領野のなかに存在すると同時に、おのれの生命圏として位置領野からは区別されたそれぞれ自立的な圏域である。だが、事例 I の K および P と事例 II のふたつの K および P の円い線の矢印の向きの違いに注目されたい。事例 I では K と P は円い線の矢印の方向性を同一にしているが、事例 II ではふたつの K のうち P と矢印の方向性を同一にしているものと異にしているものがある。K と P との矢印の同一方向性は、プレスナーによれば、K の P にたいする開放性と従属性を表わし、K と P との反対方向性は K の P にたいする閉鎖性と独立性とを表わしている。

つまり、事例 I には植物としての有機体 K と位置領野 P との関係が図示されているのであって、植物 K は位置領野 P の生命循環のなかに組み込まれていると同時に、おのれの細胞壁によって囲まれた自立的な生命体として存在している。しかし、植物 K は位置領野 P に対しては、生命体として自立しているのみであって、位置領野の生命循環全体のなかに組み込まれた生命体としては、位置領野に従属している。すなわち、植物は位置領野の自然的環境にたいしては、栄養摂取の活動と繁殖または分布を拡大する活動の両面において非意志的・非選択的・非主体的に、いわば盲目的に関係し、おのれを自然的環境のなすがままに委ねて、もろもろの偶然の組み合わせによって生育と生殖の環境要因に適したところに選ばれた個体だけがおのれの目的を達成する。

これに対して、事例 II には動物としての有機体 K と位置領野 P との関係が図示されている。ふたつの肉体のうち、下にある K (これを K 1 とする) は位置領野 P と方向性を同一にし、この点では植物的な位置形式をいまだに免れてはいない。すなわち、ここには、生育と繁殖の特定の時期において植物的な開放的な形式をとることがある動物、あたかも植物が空中または水中に孢子や種子を無目標的に拡散するように、海中に卵または幼生を放散して、一定の生育段階に達したのち適当な生育場所に到達してそこでも植物的に環境に固着した生活を営む、サンゴ類、ヒドロイド類、ホヤ類などに典型的な示されているような動物が念頭に置かれているであろう。反対に、もうひとつの上にある K (これを K 2 とする) は位置領野 P と方向性を異にしており、この点では動物有機体本来の閉鎖的・自立的な形式を高度に維持している。すなわち、この段階の動物有機体は、ある程度分化した自らの有機的な身体諸器官を中心集中する、それなりに発達した中枢神経系をもち、自らを取り巻く栄養や生殖などの面での自然環境に対し、自らの意志によって接近したり、逃避したりすることができ、位置領野 P に対して主体的・意志的・選択的に行動することができる。したがって、こうした K 2 の動物有機体は、全体として位置領野 P の生命循環のなかに生息しながらも P にたいして、事例 I の植物とは異なって、高度に自立的にふるまうことができる。つまり、動物有機体は位置領野に対して同

一方向と反対方向のいずれをもとりうるのである。事例ⅠとⅡとは、植物と動物との、あるいは動物と動物との位置領野にたいする位置的關係の仕方を、こうした根本的な形式的な差異によって表示しようとするプレスナーの苦心の試みなのである。

プレスナーによる、植物と動物が周囲の環境にたいしてとる位置形式のこうした差異への注目は、われわれにとってそれほど理解しがたいものではない。例えば、生物学者高橋英一氏は『動物と植物はどこがちがうか』のなかでこう述べている。「植物が一次元および二次元的形状を基本にしているのにくらべると動物の体は三次元的である。それは食物との位置關係が動物と植物とで異なっているからである。動物と食物の間には距離があり、動物は食物のあるところまで移動し、それを体のなかに取り込まねばならない。この捕食行動は植物のように外へ向かってひろがるのとは反対の集中的な三次元的体形を必要とし、これに足や羽などの移動のための器官を分化させている。」⁽⁸²⁾「動物であれ植物であれ、生物の形をきめるのは食物との關係、すなわち栄養環境であることがわかる。植物では生息環境が即栄養環境であるためこれに対して開放的な体形をとり、捕食活動を行う動物では生息環境に対して閉鎖的な体形をとるようになったのである。」⁽⁸³⁾この書物の著者が、まだ翻訳されていないプレスナーの『有機的なものの諸段階と人間』を読んでいたとは思えないが、それにもかかわらず、ここにはアプローチがまったく異なった方向をとりながら、結論ばかりではなくて生物学者としての用語法や思考方法までもが見事に一致した例として、やはり注目に値するであろう。このことは、プレスナーの位置性の理論が決して、生物学にかんするわれわれの常識的な理解と無縁のものでなく、むしろわれわれの日常的な経験と一致する背景ないし理論的基礎をもっていたということの直接的な証明でもあろう。

ところで、プレスナーによれば、中枢神経系によってつながれ、中心的に集中した諸組織をもち、環境にたいして閉鎖的な位置形式をもつ動物に比べて、開放的な位置形式を根本特徴とする植物の場合の欠陥は明らかである。

まず第一に、自ら葉緑素をもち、原形質または細胞内物質を外界から保護するために動物よりもはるかに強固な細胞壁をもち、この細胞壁によってしっかりした囲いまたは鑄型によって生活と進化が支えられている植物⁽⁸⁴⁾の場合には、摂食器官、消化器官、排泄器官などの肉体器官の分化は不要である。第二に、定着生活を基本とする植物は場所的運動でも欠陥をもつ。植物の運動は、走光性、走地性、走化性、または屈光性、屈触性、屈化性、屈地性に限定され、これらの限定された運動も、刺激の知覚、刺激の伝達、反射図式、運動の実行という神経系の諸過程を欠いたものであり、巻きひげ植物によるツル性のからみつき運動でさえも、中枢神経によって媒介された運動ではありえない。プレスナーは、ベルグソンが「植物は眠れる動物である」⁽⁸⁵⁾と述べたように、ロマン主義的に感情移入することによって植物の生命諸現象を解釈しようとしたりするのは反対にこう述べて、植物の位置形式の締めくくりとしている。「植物のすべての生命発現に見られる、開放的な形式という有機組織の理念は、本質現象性という

こうした原則にまったく対応して、植物の生命発現の本質的諸徴表を根拠づけている統一として示されているのであって、何らかの心的または心に類似した衝動力に逃げ場を求める必要はない⁽⁸⁶⁾、と。

ところで、環境領野にたいする位置的形式の相違という観点から植物と動物の根本的相違を明らかにしようというプレスナーの試みは、現在の生物学の到達点からすればどのように評価されうるであろうか。この問題は、プレスナーの哲学的人間学全体の評価の諸問題とも深く関連するので、本論文の最終章で取り上げる予定であるが、ここではごく簡単に要点だけに触れておきたい。

プレスナーの位置性という基準と生命の構成的諸特徴という観点から植物・動物・人間の三つの生命領域に明確な論理的区分を行おうという努力は、プレスナーに色濃く見られるア・プリアオリ主義の問題を除けば、それなりの説得力をもつといえよう。後に検討するように、生物学上の議論にかかわる個々の論点だけではなく、下等な有機体の段階でも生命体が自己をもつというプレスナーの主張は、さすがに生物学者として自らの学問的生涯を出発させた経歴にふさわしく、例えば生命世界を超越したところに精神の原理を求めて、人格という人間精神の座を人間における神生成および神の人格化＝神の受肉の場として見ようとするマックス・シェラー、そして自我・自己・意識を人間にのみ認めて人間身体を生物進化の道筋からはずれた超動物的な構造をもつものと見ようとするアルノルト・ゲーレンの人間学理論と比べれば、たしかに生物学の真の成果に依拠していると評価することができよう。

しかし、プレスナーのように、環境に対する位置形式という視点からのみ植物と動物に接近するならば、そこからは植物と動物のあいだには橋渡ししえない質的断絶しか見えてこないであろう。また、植物および動物の進化の秘密も、動物および人間と類似した植物自身のメカニズムも、そこからは見えてこないであろう。そうした仕方では、動物・人間と比較した場合の植物の諸能力の過小評価にゆきつかざるをえないことにもなる。しかし、現在の生物学では、植物と動物との橋渡ししがたい距離または断絶という考え方を強調するというよりは、まさしく生命の生態学的な共生を自覚せざるをえない現代にふさわしく、生命または有機体としての共通性と差異性との弁証法的統一という視点から、「植物が生き物であって、しかもその基本的な仕組みはヒトと同じだ」⁽⁸⁷⁾という方向性へと進展しているといえよう。

現代の生物学は、植物がもつ分化の全能性はもとより、植物生理学者によって従来は見逃されてきた、例えば植物の葉緑体と動物の赤血球との物質的構造上の類似性、胚発生の面での植物と動物との類似性、生活リズムの点での植物と動物の共通性、植物の光・重力・音（空気の振動）を的確にとらえる感覚能力を初めとするさまざまな感受、反応、運動、感応の諸能力、原形質流動に由来する生物電流とその電気的反応、病原菌に対する抗体形成と防御機構、傷害・熱ショック・酸化・汚染物質などの環境ストレスに対するシグナル伝達システム⁽⁸⁸⁾などが動物のみならず植物にも存在することなど、植物と動物の生命体としての共通性のうえに植物と

動物の生理的・構造的・発生的相違を明らかにしようとする方向を歩みつつある。

ダーウィンが晩年になってなお植物の生活リズムと運動の研究に没頭して、毎日一定の時刻に活動する性質は植物と動物に共通の遺伝的性質であると述べたばかりか、さらにやや擬人的な仕方で「幼根の先端はある下等動物の胚、すなわち身体の前端部に位置し、感覚器官からくる印象を受け取り、いくつかの運動を司る脳と同じ役目をしているといっても過言ではなからう」⁽⁸⁹⁾と述べたのも、おそらく植物と動物と人間の生物としての同系性へと向けて自らの生物学的思索を総合しようと努力していたことの一端を証示するものといえよう。植物は、プレスナーが言うところの植物の本質的な位置形式としての自然環境にたいする「開放性」のゆえにこそ、つまり動物と異なって顕著な運動を行うことができないからこそ、ある意味では動物以上に、かつてパラケルススが夢想したように、植物を取り巻く、惑星的・宇宙的規模にまで広がりうる全自然的環境にきわめて鋭敏であり、われわれがいまだに知りえないさまざまな感応諸能力を所有しているという可能性もまたないとは断定しえないのであって、この植物のいまだわれわれ人間にとって未知のヴェールは今ようやく最近の植物学の研究の進展によって取り去られる端緒が到来しつつあることに期待してよいと思われる⁽⁹⁰⁾。

したがってわれわれは、プレスナーのような植物へのアプローチは植物と動物の本質的相違を明らかにするうえでそれなりに実り多い試みであったにしても、位置形式そのものが進化論と相いれないという可能性を問題点として含んでいたということのほかに、人間中心主義的思想とも運動して、やはり動物との比較のうえで植物の生理・運動・環境応答・感応伝達などの諸能力に対する過小評価と言わざるをえない論点もまたそこには含まれていたのだ、といわなければならないであろう。

2001年7月28日（次号へと続く）

注（1）エクトロピー性 Ektropismus またはエクトロピー Ektropie という聞き慣れない言葉は、物理学者アウエルバッハ Felix Auerbach（1856～1933）がその著書“Ektropismus oder die physikalische Theorie des Lebens” [1911]（『エクトロピー性または生命の物理学的理論』）のなかで最初に用いた術語である。アウエルバッハはプレスラウ生まれで、ハイデルベルク大学でヘルムホルツとキルヒホルンに師事し、流体力学、硬度問題、音楽の物理的な基礎づけなどの研究を行ったことで知られる。周知のように、熱力学の第二法則、いわゆるエントロピーの法則は、閉ざされた系のなかでは異なったレベルのエネルギーは常に平衡状態に向かう、言い換えれば、使用不可能なエネルギーの量は世界の中では常に最大値に向かうことを示す。アウエルバッハが言うエクトロピー性またはエクトロピーとは、このエントロピーの法則に支配される物理学の世界とは異なって、生命世界または生命現象では、エントロピーとはまったく逆の傾向、すなわち同化や異化を行うことでエネルギーを強めたり結合したり、あるいは自発性にもとづいて非合理性へと向いさえもするという、生物特有の傾向性のことである。ドリーシュもまた彼の主著『有機的なものの哲学』のなかでこの概念に言及している。「アウエルバッハによって、エネルギー学説の通例第二法則といわれるものが、生物学の諸問題に直接に持ち込まれることになった。生命とはエントロピーの反対、つまり『エネルギーの低下に対する闘争』である。このことはエクトロピー性と名付けられている。私には、多様性の増大という問題がここに見られるように思われる。」（Driesch, Philosophie des Organischen, Zweite Auflage, Verlag von W. Engelmann, 1921, S. 456）

- (2) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, Gesammelte Schriften IV, Suhrkamp, S. 184
- (3) Ibid., S. 212~213
- (4) Ibid., S. 186
- (5) Ibid., S. 215
- (6) Ibid., S. 208. なお、「空隙」Hiatus というラテン語を近代哲学において哲学用語として用いたのはフィヒテである。たとえば、フィヒテの『一八〇四年の知識学』では、「さらにこうした投影はもっぱら直接的に、空隙によって per hiatum, 自分にかんするふさわしい釈明を行うができずに、起こる。」(Fichte, Die Wissenschaftslehre [1804], Fichtes Werke X, Walter de Gruyter & Co., S. 203) この「空隙」Hiatus 概念は、プレスナーやケーニヒ、さらにはニコライ・ハルトマンらによって人間学的カテゴリーのなかに取り入れられ、またゲーレンによってもしばしば用いられている。
- (7) Plessner, ibid., S. 212
- (8) Ibid., S. 211
- (9) Ibid., S. 213~214
- (10) Ibid., S. 215. 「自らのなかで措定された存在」“in ihm Hineingesetztsein” というプレスナーの表現が、フィヒテの観念論的哲学で主張される、自我による非我の「措定」につながり、プレスナーの哲学的人間学の思想がドイツ観念論にそのひとつの源泉をもつことは明らかである。
- (11) Plessner, ibid., S. 212~213
- (12) 以上の叙述にあたっては、多田富雄『免疫の意味論』を参照した。
- (13) Plessner, ibid., S. 192
- (14) Ibid., S. 193
- (15) Ibid., S. 195
- (16) Ibid., S. 196
- (17) Ibid., S. 199
- (18) Ibid., S. 201
- (19) Ibid., S. 204~205
- (20) Ibid., S. 206
- (21) Ibid., S. 211
- (22) Ibid., S. 208. 注(6)を参照されたい。
- (23) ここの叙述は W. R. クラーク『死はなぜ進化したか』三田出版会を参考にした。老化と死の問題にかんしては、そのほかに柳沢桂子『われわれはなぜ死ぬのか』草思社、スティーヴン・N・オースタッド『老化はなぜ起こるか』草思社、レナード・ヘイフリック『人はなぜ老いるのか』三田出版会などをも参照されたい。
- (24) Plessner, ibid., S. 216
- (25) Ibid.
- (26) Ibid.
- (27) Ibid., S. 219
- (28) Driesch, Philosophie des Organischen, S. 112. 最近になってドリーシュとエンテレヒーまたは調和等能系を論じた論文としては、岡田節人「生命・生物化学の一世紀」(岩波講座『科学技術と人間』第5巻、『科学・技術のニュー・フロンティア(2)』所収)と米本昌平「ネガティブ・パラダイム論—ハンス・ドリーシュの新生気論をめぐって」(中山茂編著『パラダイム再考』ミネルヴァ書房)などがある。
- (29) Plessner, ibid., S. 223
- (30) Ibid.
- (31) Ibid., S. 226
- (32) Ibid., S. 225
- (33) Ibid., S. 231
- (34) Ibid., S. 228
- (35) Ibid., S. 229

- (36) Ibid., S. 230
(37) Ibid.
(38) Ibid., S. 252
(39) Ibid., S. 249
(40) Ibid., S. 252
(41) Ibid., S. 253
(42) Ibid., S. 258
(43) Ibid., S. 259
(44) Ibid., S. 260~261
(45) Ibid., S. 261
(46) Ibid., S. 262
(47) Ibid., S. 264
(48) Ibid., S. 264~265
(49) Ibid., S. 267
(50) Ibid., S. 268
(51) Ibid., S. 270
(52) Vgl. ibid., S. 270ff.
(53) Ibid., S. 271
(54) Ibid., S. 271~272
(55) Ibid., S. 270
(56) Ibid., S. 270
(57) Ibid., S. 273~274
(58) Ibid., S. 276
(59) Ibid., S. 277. だが、現代の生物学でいう若返り *Verjüngung* とは、例えば繊毛虫類のゾウリムシが小核を交換して交接する時に起こる現象のことを指す。
(60) Ibid., S. 278
(61) Ibid., S. 272
(62) ゲーテ「骨学にもとづく比較解剖学総序説第一草案」(『ゲーテ全集』第14巻, 潮出版社, 181頁)を参照のこと。なお、1798年1月6日のゲーテのシラー宛書簡も参照されたい。
(63) ゲーテ『色彩論』序論にはこう書かれている。「眼が存在するのは光のおかげである。未決定の動物的補助器官から、光は光と同じようなものとなるべき一つの器官を呼び起こし、こうして眼は光にもとづいて光のために形成される。それは内なる光が外なる光に向かって現われ出るためである。」(『ゲーテ全集』第14巻, 潮出版社, 313頁)
(64) Plessner, ibid., S. 274
(65) Ibid., S. 275
(66) Driesch, *Philosophie des Organischen*, Zweite Auflage, S. 260
(67) Jakob von Uexküll, *Theoretische Biologie*, Suhrkamp, S. 227
(68) Ibid., S. 290
(69) Ibid., S. 261
(70) Plessner, ibid., S. 37
(71) Plessner, ibid., Nachtrag, S. 431
(72) Ibid., Nachtrag, S. 431
(73) Plessner, *Die Frage nach der Conditio humana*, *Gesammelte Schriften VIII*, Suhrkamp, S. 144
(74) Ibid., S. 145
(75) Ibid., S. 144
(76) Plessner, *Die Stufen des Organischen und der Mensch*, *Gesammelte Schriften IV*, S. 280
(77) Ibid., S. 283

- (78) Driesch, Philosophie des Organischen, Zweite Auflage, S. 39ff.
(79) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, Gesammelte Schriften IV, S. 301
(80) Ibid., S. 284
(81) Ibid., S. 285
(82) 高橋英一『動物と植物はどこがちがうか』研成社, 35頁
(83) 同上書, 36頁
(84) E. J. H. コーナー『植物の起源と進化』八坂書房, 12頁を参照されたい。
(85) Ibid., S. 290
(86) Plessner, Die Stufen des Organischen und der Mensch, Gesammelte Schriften IV, S. 291
(87) 塚谷裕一『植物のこころ』岩波新書, 206頁
(88) 植物がもつこれらの諸能力については、『植物の環境応答—生存戦略とその分子機構』(『細胞工学』別冊・植物細胞工学シリーズ11) 秀潤社, 篠崎・山本・岡本・岩淵編『環境応答・適応の分子機構』共立出版, 寺島一郎編『環境応答』(朝倉植物生理学講座5巻) 朝倉書店などを参照のこと。
(89) ダーウィン『植物における運動の力』(この訳文は, トムプキンズ・バード『植物の神秘生活』工作舎, 212~213頁による) を参照のこと。
(90) トムプキンズ・バード『植物の神秘生活』(工作舎) は, 科学史のなかで必ずしも知られてはいない興味深い人物や実験結果にかんする話のうちに, ささまざまな疑似科学の資料をもまた集めているばかりか, 次第に植物にたいする擬人化に話題が傾斜していき, 揚げ句の果てはシュタイナーや心霊学を持ち出している点でいわゆる「トンデモ本」の部類に入るであろうが, 塚谷裕一『植物のこころ』(岩波新書) は最新の植物生理学・植物発生学の成果を踏まえて書かれた好著だと思われる。表題に植物の「こころ」とつけたところに, 前者のような書物とは別のかたちで植物の生命に対して科学的なアプローチが積み重ねられていった場合の方向が暗示されていて示唆的である。

Positionalitätsstheorie in philosophischer Anthropologie Plessners (3)

OKUYA, Koichi

Abstract

In the previous two articles, I discussed the philosophical premises underpinning Plessner's philosophical anthropology and the philosophical and biological discussions from which his philosophy arises. From here onward, I examine the central ideas of the theory of the positionality, which is at the core of philosophical anthropology.

This paper comments on and clarifies Plessner's theory on the essential characteristics of organic life in general, and the essential characteristics of plant life. First, I return to his understanding of the concept of the positionality, which is established based on the assumed boundary between the life form and the medium that serves as that life form's environmental range. Next, I interpret Plessner's theory on the dynamic and static attributes generally possessed by the life form, and on the possibility of self-adjustment and equipotentiality of living things. Finally, I clarify the positionality, in the ecosystem, of plant life that is characterized as an open organic form and the positionality of plant life as distinguished from that of animal life. At the same time, positive aspects and limitations inherent in Plessner's approach are discussed.

(おくや こういち 本学人文学部教授 哲学専攻)